ビルマの竪琴

竹山道雄

ビルマの竪琴

竹山道雄著

中央公論社

ビルマの竪琴

定價一八〇円

昭和二十三年十月五日　初版發行
昭和二十五年十月十日　六版發行

著者　竹山道雄

發行者　東京都千代田區丸ノ内二丁目二　栗本和夫

印刷者　東京都板橋區板橋十丁目二四八四　山田博

發行所　東京都千代田區丸ノ内二ノ二　丸ノ内ビルディング五九二區　中央公論社
電話丸ノ内五三五番
振替口座東京三四番

株式會社三陽社印刷

目次

ビルマの竪琴　1
第一話　うたう部隊　3
第二話　青い鸚哥（インコ）　47
第三話　僧の手紙　178
あとがき　277

ビルマの竪琴

兵隊さんたちが大陸や南方から復員してかえってくるのを、見た人は多いと思います。みな疲れて、やせて、元氣もなくて、いかにも氣の毒な樣子です。中には病人になって、蠟のような顏色をして、担架にかつがれている人もあります。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

こうした兵隊さんたちの中で、大へん元氣よくかえってきた一隊がありました。みないつも合唱をしています。しかもそれが、むずかしい曲を二重唱や三重唱で上手にうたうのです。構須賀に上陸したとき、出迎えていた人々はおどろきました。そうしてたずねました。

「きみたちはそんなにうれしそうに歌をうたって、何を食べていたのだね」

べつに食物がちがっていた訳ではないのですが、この隊はビルマにいたあいだ、いつも歌の練習をしていたのです。隊長が音樂学校を出たばかりの若い音樂家で、兵隊たちに熱心に合唱をおしえたのです。それで、この隊は歌のおかげで苦しいときにも元氣がでるし、退屈なときにはまぎれるし、いつも友達同士の仲もよく、隊としての規律もたっていました。長い戰爭の間には、こうしたことがどれほど助けになったか分りません。この隊が元氣よくかえってきて、出迎えの人々をおどろかせたのは、こうした訳だったのです。

この隊にいた一人の兵隊さんが、次のような話をしてくれました。

第一話　うたう部隊

1

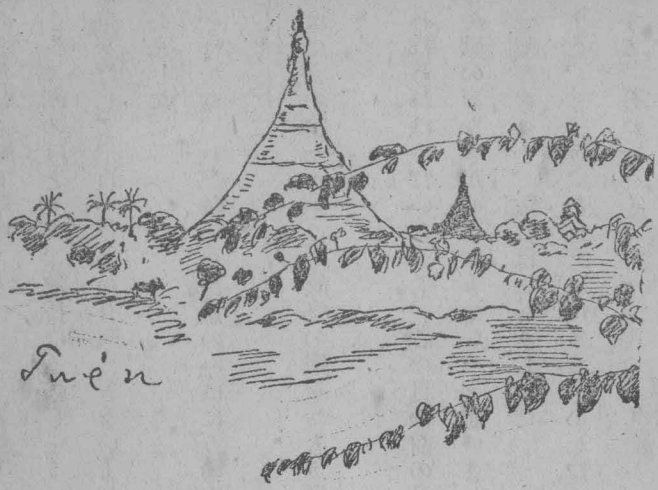
ほんとうにわれわれはよく歌をうたいました。嬉しいときでも、つらいときでも、歌をうたいました。いつ戰鬪がはじまるかもしれない、そして死ぬかも分らない、せめて生きているうちにこれだけは立派にしあげて、胸一杯にうたっておきたい――、そんな氣がしていたからかもしれません。隊の者はみな心からうちこんで練習をしました。それも、なるべく深みのあるすぐれた歌をうたいたがりました。下らない流行歌などはいやがって、誰も口にする者はありませんでした。それで、もちろんお百姓や勞働者だった人が多いのですが、わが隊の合唱はずいぶん高尚なむずかしい曲までこなしていまし

た。

いま思い出しても樂しかったのは、ある湖のほとりでした合唱です。

われわれは行軍をして、鬱蒼とした森の中の谷を下ってゆきました。すると行手に湖が見え、そのまわりに町が白い斑点のようにうかんできました。

その町はむかしビルマの王様の離宮のあったところでした。入江のほとりに白い壁の家が群がって、なかば水につかって、影をうつしています。めずらしい形をした円屋根、鐘楼、尖塔などが空にそびえています。



この空の色が、熱帶ですからじつに綺麗なのです。蛋白石といふ宝石を御存じですか。ちょうどあのような白い色に光って、その中にさまざまな複雜な光がまじってキラキラとしているのです。こうした空に、あの円くうねった大理石の塔が立っているところは、まったく夢の中のようでした。

われわれは三日ほどこの町に駐屯して毎日合唱しました。その曲は「春高楼の」だの「菜の花畠に」のようなむかしなつかしいものから、讃美歌の節もあり、くだけたものでは「パリの屋根の下」、それからもっとむずかしいドイツやイタリアの名曲ま

であるといふ風でした。

ここの湖のほとりで、隊長はうれしそうに指揮棒をふりました。われわれも胸の底から声をだして、自分たちの合唱にききいりながら、この絵のような湖にむかって歌をうたいました。

それから、わが隊のお得意の「はにうの宿」を、三重唱四重唱にしてくりかえして練習しました。

「はにうの宿」――この故郷の家をおもう歌は、いつきいても心にしみ入るような曲です。

われわれはうたいながら、この目の前の景色を故郷の家の人たちに見せてやりたい、この歌の声をきかせてやりたい、と思いました。

合唱が終ると、隊長はいいました。

「よし、きょうはこれだけにする。あしたはまたこの時間に、今度はあたらしい歌を練習する。分れ」

そして、隊長は一人の兵隊をよびました。

「おい、水島、伴奏はできたかね」

水島とよばれたのは上等兵です。中背のやせた人で、ひきしまった体は日にやけてほとんどまっ黒ですが、大きな凹んできれいに澄んだ目をしています。

この人はこの隊に入ってからはじめて音楽を知ったのですが、元來天分があったとみえて、みるみるうちに非常な上達をしました。自分でも夢中で音楽にこって、寢てもさめても歌のことを考えていました。ことに、自分で樂器をこしらえて合唱の伴奏をするのですが、それがすばらしい腕前で、さまざまの曲にさまざまの伴奏を立ちどころに作りました。

いったいそんなところに行っていた軍隊に、樂器なんかがあったのか、とおっしゃるのですか。ありましたとも。いろいろの種類のじつにめずらしい樂器がありました。

兵隊たちのもっていた樂器をあつめたら、面白い博物館ができると思いますね。兵隊はどこに行っても、暇ができると、きっと誰かが樂器をつくります。中には專門家もい

るのですから、不自由な材料をつかって、びっくりするほど立派なものを作りだします。吹奏楽器は、芦や竹をきって穴をあけた簡單なものから、こわれた機械の部分品をとりつけた本式の喇叭まであります。打樂器なら、木の枠に犬か猫の皮をはった鼓から、ドラム罐に何かの皮をはったのまで見たことがあります。虎の皮だといっていました

が、どうでしょうかね。とにかくすごい音がして、よく響いて、その隊では自慢にしていたものです。

隊によっては、どうして作ったものか、ヴァイオリンやギターまで持っているものまでありました。

われわれの隊で一番よく使われていたのは、一種の竪琴でした。

これはビルマ人がひく竪琴をまねて作ったものです。この國の太い竹を共鳴体の胴にしてあります。それに、やはり竹を曲げてすげて、絃をはります。絃は銅、鉄、またはアルミかジュラルミンの針金です。低い音をだすのは革紐です。こうした絃をはって、音程を合わせると、それもずいぶん苦心の末ですが、めずらしい竪琴ができました。

水島上等兵はこの竪琴の名人でした。いろいろに工夫して曲をつくって彈いていまし

た。彼がこの竪琴をひくと、琵琶とピアノのあいだのような音がいくつもからみあって、風の中にただよいます。しかし、日にやけて戰鬪帽をかぶった兵隊がこうしたやさしい樂器を抱いて、夢中になって彈いているのですから、はじめての人が見たら、きっとおかしくて笑いだしたでしょう。

いま、水島上等兵は隊長にいわれて、その竪琴で自作の「はにうの宿」の伴奏をひきました。伴奏というよりも、ほとんど独奏曲といっていいくらい、手のこんだ面白いものでした。

兵隊たちはまわりに集まって、腕をくみ、目をつむって、この竪琴をききました。

あたりの空氣は匂いがよく、しずかで、とろりとしています。竪琴の音は湖をわたって、とおくの森の下あたりの水の面に谺します。ここらの森は大きなチークの木です。そこに猿が跳ねているのも見えますし、またさまざまの鳥がしきりに鳴きかわしているのもきこえます。

そのとき、とつぜん、どこからか一羽の孔雀が舞いだしてきました。しばらく兵隊の

いる前をゆっくりと歩いていましたが、また舞いたちました。そうして、靜かな大氣の中にはたはたと翼の音をたてて、湖の面に影をおとしながら飛んでゆきました。

これはほんとうに樂しい思い出です。

2

しかし、そのうちに戰局が次第にわるくなり、ついには誰の目にもとうてい見込みがなくなりました。そして、われわれは見知らない國を、山から山と逃げてあるくことになりました。何とかして國境の山脈を越えて、東のシャムに入ってしまおうとしていたのです。あるときは、わざと嶮しい間道をえらんで幾時間もよじ登りました。あるときは、深い谷にかかって風にゆれている吊橋をわたりました。トラックが次第に損じて役にたたなくなりましたから、しまいには、荷物は牛車にのせてひっぱったり、肩でかついだりしました。こうして村から村へと食糧を求めながら行くのですから、ずいぶんみじめでもあり、危險でもありました。

幾度もおそろしい目にあいました。もうとてもだめだ、と思ったこともありました。ところが、そういうときには、水島上等兵の堅琴がふしぎなくらい役にたちました。

ある夜などは、幾重にも重なった山の中で、いつのまにか敵にかこまれてしまいました。そして、しだいしだいに追いこまれて、とうとう狭い谷に入りこんでしまいました。木の間をもれる星あかりですかして見るだけですから、道もよく分りません。われわれはまったく進退きわまりました。

敵軍は左右の山の尾根の上にむらがって、燈火を振ってたがいに合図をしながら、われわれのありかを探しています。銃火がしきりに頭の上をとび交います。空氣の中でキーッと絹を裂くような音がします。それがながい尾をひいてもう終るかと思うころに、おそろしい音をたてて破裂して、このせまい谷の中に反響します。そして、土や岩がくずれおちてきます。

——もうここで全滅するほかはないかもしれぬ、と思いました。そうして暗い谷底のしめった木の蔭に坐りこみました。みな覚悟をきめています。そして、シーンとして、

脊を曲げて、じっと目を見ひらいて闇の中をみつめていました。自分の胸の動悸がどくどく音をたてて、のどのあたりまで高く鳴っているのがきこえました。

山の上では、なおしきりに燈火がゆれて合図をして、あちらこちらに動いています。そのうちに、そうしてじっと坐っているのにたえかねたとみえて、隅の方で呟く声がおこりました。

「なむあみだぶつ……、なむあみだぶつ……」

すると、それを叱る「しっ！」という鋭い声がしました。水島上等兵の声です。そうしていいました。

「いつどこに敵の斥候がきているか分らんぞ」

人々はまた默りました。そうしてふたたび、遠くにおちる砲弾、思いもかけぬ近いところで目を眩ますような光をあげて炸裂する照明弾、土や岩がざーっと落ちる音、木の幹が裂ける音などが、あちらこちらにひびきました。

それがすこししずまったとき、水島が隊長のそばににじりよって何事かをささやきま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com